

自然の中で

# 野外教育情報

2020 第 **11** 号

◆今号の特集◆

「あのときのひとこと」

令和2年2月20日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

## 「永吉さん、それならみんなで考えてみようか。」

永吉 宏英（日本野外教育学会会長 大阪府キャンプ協会会長 大阪府青少年活動財団理事長）

「永吉さん、それならみんなで考えてみようか。呼びかけは僕がするから」、相談とも愚痴ともわからぬ悩みを漏らした私に、真剣に対応してくれたのは石田易司さん。当時は朝日新聞大阪厚生文化事業団に所属し、社会福祉分野に造詣が深く、長年にわたって障がい者キャンプを実践して来た、頼りになるキャンプ仲間でした。

「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正を受け、勤務する法人がレクリエーション教育に特色を持つ介護福祉の専門学校をつくることになりました。具体的なカリキュラム作成の段階になって、大学でレクリエーションの授業を担当していた私にお鉢が回ってきました。当時は介護が必要とされる障がい者や高齢者のレクリエーションの指導書は見当たらず、あったとしても仲間づくりのゲーム・ソング・ダンスが中心で、高齢者の能力や個性に焦点を当てたものなどありませんでした。高齢になり、病気になったり障がいを持ったりすると、いろいろと不自由になるのは仕方ないかもわからないけど、もっと高齢者の能力や個性が前向きに活かされるレクリエーションがあるはずだ、キャンプだってできるはずだと考えました。藁をもつかむ思いで相談したのが石田さんでした。

石田さんは早速、医療や介護、レクリエーションの専門家に呼びかけて、「高齢者レクリエーション研究会」（1989年）を発足させました。研究会は月1回。研究紀要を発刊し、ワークショップを開催して、11年続きました。高齢者の個性や能力を前向きに生かす、みんなの想いが「シニアキャンプ」や「認知症高齢者キャンプ」の実践につながっていきました。研究会での学びと人のつながりが、私たちのキャンプを高齢者や障がい者も含めたみんなのキャンプ、「キャンピング・フォア・オール」へと変えていきました。

振り返ってみれば、私のキャンプの考え方が大きく変わるきっかけを与えてくれたのは、愚痴とも相談ともわからぬ悩みに真剣に対応してくれた石田さんの一言だったのです。

- 永吉宏英（ながよし ひろひで） 清流四十万川の上流で育ちました。豊かな自然に包まれて、遊びと生活と自然が密接に結びついていました。自然と遊びながら生活のすべを学びました。大学院の学生の頃から野外教育や自然体験活動に関わり出したのも、幼少期の豊かな自然体験があったからだと思います。現在も学会の会長やキャンプ協会の会長として、自然に学び、自然と遊ぶ生活を楽しんでいます。

# キャンプで人を紡ぐ恩師のひとこと

あのときのひとこと



## 築山 泰典

野外教育指導者として必要な資質の一つに、臆病者であることが挙げられると私は思います。

「ちゃんと考えろ!」「何止まっている!考えながら動け!」「走るな!バタバタしたらキャンパーが慌ただしくなるだろ!」。

30年前、こんな言葉(罵声?)で私は野外教育者として育ち始めました。そんな言葉に恐さを感じながらも、恩師が紡ぐキャンプとそこでのキャンパーの成長にキャンプの虜となっていました。学生の中には先生のことを「ミスター理不尽」と称する学生もいましたが、私にはその勇気すらありませんでした。

8年後、京都YMCAのスキーキャンプに初めて“ディレクター”として関わることがありました。100名を超える幼児から小学校低学年までの子どもたちが対象の事業でした。

子ども達と一緒にバスで移動し、目的地に到着した瞬間、「子どもたちの荷物をどこに移動させるか考えていない。指示できない!」その事に気づき、大きな荷物を持って右往左往する子どもたちの様子が頭に浮かび、大きな怖さに包まれました。その後、荷物置場を確保し、移動の指示を無事に出すことが出来ましたが、その時の怖さは今でも忘れることはできません。



恩師との教え子の結婚式にて。  
(左恩師、右その上司。筆者は後ろ)

この時、先生からの「言葉に感じた恐さ以上の怖さ」を実感しました。そして、「野外教育指導者として、怖さを知る愚かな自分であり続けること」の大切さに気づかされました。

キャンプは自然の中が教育の場であるため、常に絶対は存在しません。また、判断が必要な場面では、周囲に少しも不安な表情を悟られてはいけません。そんな野外教育の指導者としての哲学を恩師の言葉だけでなく存在のすべてから授かったようにも感じました。

一緒に15年間野外教育を実践する機会を得、福岡での私の野外教育の実践もそろそろ15年となります。野外教育者として、大きな事故や怪我もなく今まで実践できていることは、京都での15年の教育があったからだと感謝しています。

私が京都を離れ福岡大学に着任することが決まった後、恩師との最後のキャンプ実習では、キャンプファイヤーの場面でオリジナル曲を披露してくれました。そして、出発する前に後輩たちと送別会の場を用意し、寄せ書きをプレゼントしてくれました。そこには、キャンプでの歌詞の一部が書かれていました。

「私を愛する人がいる 私が愛する人がいる  
私を支える人がいる 私が支えるひとがいる  
成功を祈る」と。これが、私の一生の宝物となっているひとことです。

私にとって「ひとこと」は「人こと」でした。

### ● 築山 泰典 [つきやま やすのり]

福岡大学スポーツ科学部教授

1969年京都市生まれ、京都教育大学大学院終了後、民間企業での営業職を経て、京都YMCA国際福祉専門学校で教員としてスタートする。

2006年より福岡大学にて野外教育・レクリエーションを担当する。

# 「また来るね!」が最高のほめ言葉



安達 章美

子どもたちにとって、学校の教室が日常の世界とするならば、自然の家は非日常の世界となります。私自身これまで、1年間同じ仲間と同じ環境で学び合う、そういった環境で、子どもたちを見守り、成長を直に感じることができる学校教育の素晴らしさややりがいを感じてきました。

現在は、日常から非日常の世界へと場を移し、新たな出会いの日々の中で、自然体験を通した青少年教育の自立と充実を目指しています。

当所が主催する教育事業では、様々な地域から集まった子どもたちとさまざまな活動に共に取り組みます。子どもたちが教室を飛び出し、宿泊を伴いながら、初めて出会った仲間たちと共に過ごして自然体験活動を行います。非日常の世界をどっぷり楽しむ時間です。参加した子どもたちは、とても意欲的に活動に取り組み、どの瞬間も輝かしい笑顔や充実した表情を見せてくれます。

私にとって、参加した彼らからの最高のほめ言葉は、「また来るね!」です。

花山に赴任して1年目の夏、前任校の子どもたちを招きました。その中に4年生の女子児童Aが参加しました。2～3年生の頃に教室に入れない状態が続いたり登校しぶりが見られたりした子です。そのような子が参加してくれたのです。

「沢活動の花山」と謳っているとおり、1泊2日沢三昧のプログラム。沢の上流コースの『千代滝』という大きな滝でのジャンプにチャレンジしました。子どもたちにとっては大きな挑戦の場です。数人が手を挙げ、その中にAさんの手がありました。体の何倍もある崖を登って…いざ、自分の番。正直、私は難しいのではと思っていました。

やはり、足がすくんでなかなか飛び込めません。かなりの時間待ちました。自己との対話の時間です。余計なことは一切言わず、じっと待ちました。周りの子どもたちも、見守っています。彼女にとって『挑戦』と『自己の対話』の時間は必要不可

欠なアイテムです。しかし、明らかに長すぎです。周りの子どもたちも限界かなあとっていると…スッと飛び込みました。「ジャポーン!」

水中から顔を出した時には、拍手の渦です。私も『よく頑張ったな』くらいは言ったのでしょうか。その時の会話はよく覚えていません。

そして最終日、「先生、また来るね!」と言って帰った時の表情と言葉は忘れられないものがあります。5年生になった今、彼女は明るく元気に登校しているとのことでした。

教室という日常の世界であれば、「さようなら。また明日」が定番です。そして、その言葉通り確実に明日会うことができるでしょう。

しかし、自然の家で過ごした非日常の世界での「また来るね」には、またここで会える確実性はありません。子どもたちにとって「また来たい」と思わせるような魅力と実感が自然体験活動には、たくさんあります。成長した彼らにまた会える日を楽しみに、約束とは違う「また来るね」の言葉を受け入れたいと思います。



大きな挑戦：千代滝からのジャンプ

● 安達 章美【あだち あきよし】

国立花山青少年自然の家 企画指導専門職

1971年生まれ。宮城県の教員として、PAの手法を取り入れた宮城県独自の教育手法「みやぎアドベンチャープログラム(MAP)」の指導・普及に取り組んできた。MAP研究会事務局も担当している。

# 面白がれるオトナであれ



藤樫 亮二

「森に100回入ったら、100回新しい発見ができる自分でいたい」

NPO法人体験学習研究会の「冬のヤガイカツダー」に参加をした小学校の先生もっさんが初日に言った言葉です。ターミネーターのT1000のモノマネも上手で、この小学校の先生、最高だなと思ったのをよく覚えています。

先日、大学で教員仲間と大事な打ち合わせをしている最中に、急に学生に話を横入りされムツとしたことがありました。僕らが話をしていることに気がついてほしかった。「お話しているところ失礼します」など、ちょっとした気遣いがお互いの心地よさを作ります。「気づくこと」が大切。

先日参加した玉川大学のシンポジウムで、21世紀型の学びは「気づき」から始まるというお話を聞きました。気づく→考える→行動することが、自分の興味を「探求」していく力につながる。

「あ！そうだったのか！」と、何かを発見する瞬間、人は気づきスイッチが入っています。A-ha！体験、別名「あー！ほー！へー！」な学び。

プロジェクトアドベンチャー（PA）では、子どもたちは仲間とのやりとりから他人の感情や思考に出会い、自分とのギャップにゆらいで気づきを得ます。また、社会性のこと、個人の内面のことだけでなく、アクティビティの試行錯誤の中で、うまくいく（いかない！）方法にも気がつきます。

また幼稚園では、「どうしたら泥団子が丸くなるか？」「フラフープが坂道をうまく転がるには？」と、遊びの中で、子どもたちは「あー！ほー！へー！」にたくさん出会います。「興味を持ってやってみる」体験こそ、「気づく力」への足がかりなのかもしれません。

ある保育の研修会で観た映像で、子どもたちがリヤカーで段差を超えようと試行錯誤している場面がありました。「この場面で何が面白いと思うか？」を、参加した先生たちで対話すると「だれ



冬芽との出会い

か手伝って！って言えるのがいいね」、「勝手に協力が始まったね」、「諦めないよね」など、リヤカーを引いて楽しんでいる子どもたちの姿に注目したり、「こっちでこれだけリヤカーで盛り上がっているのに、横で集中して砂遊びしている子もいるね！」と、別の視点があったりしました。

子どもの遊びに興味関心を示して、面白がる大人たち。子どもたちの遊び（探求）を否定することなく、試行錯誤する機会を尊重し、見守ったり、時に介入したりしながら子どもたちの環境に関わること。そんな関わりの中で、子どもたちは「気づく→考える→行動する」のプロセスを、安心して体験することができるのではないのでしょうか。

そんな大人であるためにも、まずは大人自身が様々な体験を通して、「気づく力」を養っておくこと。僕にとって冬のヤガイカツダーは発見と驚きの連続でした。「なんでも面白がれる力」を持ったもっさんと仲間たちとの出会いに感謝。

## ● 藤樫 亮二 [ふじかしりょうじ]

学校法人藤樫学園理事、PAJ非常勤ファシリテーター

1980年東京生まれ。玉川大学で、玉川アドベンチャー教育と出会う。ニューハンプシャー州のPlymouth州立大学でアドベンチャー教育を学ぶ。

遊びゴコロを持って人の成長の支援をすることをモットーに、幼稚園で働きつつ、PAJや大学で体験学習プログラムを实践。

# 「隠し味はニンジン」



阪田 昌三

あれから20年。どこかの漫談のセリフのようですが、私がキャンプと出会った頃のエピソード。

大学一回生の夏休みサークルの先輩から誘われて障がいのある子どもたちと3泊4日のキャンプに行かないか？と声を掛けられ、当時、すべてが初めて尽くしの私は、緊張と不安の中、参加することになりました。

## ▲「キャンパーのひとこと」

私がマンツーマンで一緒に過ごす自閉症のA君。年齢も近く何となく親近感が持てるかなと思いましたが、プレキャンプ含めて2回ほどしか会っていない中では、簡単にはいかないものでした。

A君はプログラムに参加するより何もせずに椅子に座ってのんびりしているほうがいいみたいで、どのように一緒に過ごして、関わっていくことが良いのか？ また、A君との距離は短くならないまま2日が過ぎました。

3日目の自炊メニューはクリームシチュー。普段あまり動かなかったA君はスイッチが入ったようにシチューづくりに参加してきました。参加というより、彼自身がシェフのようにみんなに指示をして作りました。A君によると「ニンジンはずりおろして入れると隠し味になる」と。積極的に話してはくれなかったA君が、教えてくれたこのひとことで、お互いの距離はすぐ縮まりました。

周りからすれば日常会話にしか思えませんが、私にとっては魔法のような言葉でした。これが人とヒトが繋がるって感覚。2日間のモヤモヤした時間は何処へ、キャンプが終わるまで、たくさん話をして、プログラムを楽しみ本当に充実していました。解散の時には寂しくなるほどお互いの関係がより強くなっていました。

## ▲「保護者のひとこと」

レスパイトケアという言葉は珍しくありませんが、障がいのある子どもさんのいるご家庭は、子どもを中心に生活が動き、両親や兄弟が24時間365日見る

のが当然だった時代。そんな中でのキャンプから帰ってきた後、保護者の気持ちを聞きました。

- 子どもたちを見送った後、温泉に入り、料理を食べ、「いのちの洗濯」をすることが出来ました

- 4日間のキャンプの間、「娘が主役に」。Bくんが生まれてから生活リズム、ペースを決めてしまうようになってから、いつもお姉ちゃんには我慢と辛抱をさせてばかり、娘のために何でもしてあげることができました

- キャンプの4日間は「干天の慈雨」でした。24時間べったりの日々、体力気力が失いそうところをしっかりと充電できました

当時18歳の私にとっては大人に感謝されるなんてほとんどなかったので、キャンプへ行ったことが「感謝」に変わるということを経験しました。

「いろんなひとこと」がきっかけで大学卒業後は障がい者支援施設に就職することになり、自分の人生をも変えてしまうくらい衝撃的な出来事だったと思います。A君との出会いに感謝。



スタッフみんなでハイポーズ！

## ● 阪田 昌三【さかた しょうぞう】

特定非営利活動法人キャンピズ

就労継続支援B型事業所 ウィズ芦屋管理者

1980年、奈良県生まれ。2017年から当法人で障がいのある方の就労支援事業を立ち上げ、キャンプと就労支援という二つの肩書きで活動中。

# 「天下無敵を目指しなさい」



徳田 真彦

今回の執筆にあたって、自身のこれまでを思い返すと、本当に多くの先生方や同期、先輩にお世話になっていると実感しました。お世話というときまだ響きが良いかもしれないのですが、迷惑といってもよいかもしれません。それゆえに、「あのときのひとこと」は、嬉しい事や悔しい事など思い当たるものは多くあったのですが、今でも自身の目指す場所となっている言葉を紹介させて頂けたらと思います。

大学院生の頃、私はある意味強迫観念的に、野外教育への学習欲求を満たしていました。先行投資だと思い、興味のあること、力になると思ったことをひたすらに実行した結果、2年間で約〇〇〇万円を出費したというのは未だに冷や汗ものです。何はともあれ、知れば知るほど奥深い、懐の深い野外教育にすっかりハマってしまいました。

その時の私は、ひたすらに「強さ」を追い求め、自身の経験値や技術を伸ばすことにこだわっていました。自分の経験した事、学んだことが全てであるかのように、自身の学んだことと異なる見解や行動があると、過激な言葉を使ったり、排他的な言動を取ることが多かったように思います。それはある意味「弱さ」なのですが、その時の私はとても狭い世界しか見えていませんでした。とはいえ、様々な出会いや経験を積む中で、自身も



目指す先は、遥か遠く

「強さ」とは何かという疑問を持ち始めていました。

そんなある時、キャンプを終え、恩師である伊原久美子先生(大阪体育大学)と二人で帰っていたとき、自身が目指す道、強さとは何なのかについて相談をしました。伊原先生は私の話を一通り聞いた後、こう言いました。「あなたは天下無敵を目指しなさい」。言葉の響きは大好きですが、はじめは疑問に思いました。私にとって「天下無敵」＝「強さ」であるように感じたからです。そんな様子を察してか、『天下無敵というのはただ「強い」という事では無く、「敵がない」ということ、いくら強くても敵が多ければやりたいことは実行できないからね』と話を続けました。ただただ納得し、自身のこれまでの取り組み方や、弱い「心」を揺さぶられたように感じました。

天下無敵に至るためには、当然「強さ」も必要ですが、それと同時に周りから「応援される人間である」という人間性がとても大事であることに気が付きました。この気づきは、自身の排他的であった部分は「弱さ」であることに気づかせてくれ、自身の至らない部分に目を背けない「強さ」にも気づかせてくれたように思います。

「天下無敵」までの道のりは遥か遠く感じますが、目指す目標として確固たるものになっています。ある意味この目標は、誰が評価するものでもないと思うので、もしかすると最も難しいものであるのではないかと考えています。だからこそ目指し甲斐があります。挫折も多くあると思いますが、これからも強さは伸ばし、弱さには目を背けずひたすらに努力を続けたいと思います。

## ● 徳田 真彦【とくだまさひこ】

大阪体育大学体育学部講師

1990年愛媛県生まれ。大学3年生からのゼミ活動で自然の持つエネルギーの偉大さを感じ、大阪体育大学大学院にて野外教育を学ぶ。

現在Wilderness Education Association Japan 代表理事を兼任。Japan Outdoor Leaders Award 2019 U-30賞受賞。

# 子どもたちの“手”がくれる ▲ たくさんの“ことば”

針ヶ谷雅子

「あのときのひとこと」といっても、ろうの子どもたちのキャンプでは、おもに「手話」でコミュニケーションしているわけで、それを紹介しようとする、子どもたちの手話を「日本語」に翻訳したものになる。手話のネイティブでない私は、彼らが伝えたいことをちゃんとキャッチできているのか、いつも案じている。

このキャンプでは、ろうの子どもたちだけで一班をつくり、食事やテント泊などのキャンプ生活と、遠征などの主なプログラムはこの班で活動している。でも、8泊9日のあいだには、聞こえる子どもたちと一緒に活動する場面もある。そのような状況をどんなふう感じているか（感じたか）、キャンプの前とキャンプ最終日に、手話でインタビューしてみることにした。

キャンプ前の「聞こえる子どもが話しかけてきたらどうする？」という質問に、一人の男の子がシンプルな手話で「叫んで逃げる」と答えた。これはどうしたものか、と心配した。キャンプ中、彼は叫んで逃げることはなく、隣の班の聞こえる男の子と遊んだりしていたが、どんな気持ちだったかは、最終日のインタビューでもはっきり答えなかった。

どんな言語・方法でのコミュニケーションにおいても、「通じる」こと「通じない」ことがある。「通じること」は、「心が安定する」ことや「自分の存在に対する肯定感」と関係があると、どこかで読んだことがあるが、彼らはいつもどこかで「通じない」ことを予感し、恐れ、時には自信を持たず、ストレスを感じているのかもしれない。

別の女の子は、キャンプの最終日のインタビューでこんなことを言った。「覚悟を出した（手話そのまま）から変わった。覚悟を出せたきっかけは、子どもがそれぞれ違っていいと感じたから。」彼女も、キャンプ前、不安なことのひとつに聞こえる子どもとのコミュニケーションを挙げていたの



15キロの遠征のあとで：富士山麓

だが、キャンプをやってみて無くなった、という。キャンプ中に「聞こえる友だちができたよ〜」とそっと教えてくれたりもした。普段、友だちが増えることはほとんど無いという。最後は「友だちが10人くらいできた」と笑顔だった。

まず、ちゃんと「通じる」場で、自分の発言がきちんと尊重される経験が覚悟を出すきっかけになるのだと思う。ご飯を食べながら、山道を歩きながら、「通じる」仲間がいると、なんと楽しそうにすることか、なんておしゃべりになるのか、と驚く。そして、自分もその一員になって夢中で話したり（手話で）、笑ったり怒ったりできている瞬間にふと気付き、幸せな気分になる。「通じている」と感じられるからだ。

多くの人の力を借りて、必死で準備し、なんとか続けることができた2回のキャンプだが、子どもたちの“手”がくれるたくさんの“ことば”を、これからも大事にしていきたい、と、これを書いてあらためて思った。

● 針ヶ谷 雅子 [はりがや まさこ]

明治大学兼任講師

公益社団法人日本キャンプ協会理事

ろう・難聴児の体験活動を支える会代表



# 未来に向けた"美しいことば"

## フィンランドのユースワークに学んだこと

### 金山 竜也

私は、内閣府の「地域コアリーダープログラム」に団長として参加し、8人の若者とフィンランドでユースワークについて学ぶ機会を得ました。

「ユースワーク」というのは、馴染みのない概念かもしれません。フィンランドでは29歳以下を対象とした、学校教育を除く多くのサービスをユースワークと定義づけています。だから、野外教育と直接には関係ない部分もあるのだけれど、少しだけお付き合いいただければと思います。

私たちは、教育文化省の役人から現場のユースワーカーまで、さまざまな方に話を聞きました。役割はそれぞれにまったく異なるのですが、そのほとんどすべての人から「Participation (参加・参画)」「Inclusion (包摂・インクルージョン)」「Equality (平等)」の3つのことばが聞かれたことはとても印象的でした。

このどれもが大切なことは、私たちも頭ではよく理解しています。しかし、この"美しいことば"を私たちはきちんと口にしているだろうか？と、何度も考えてみました。「私たちは平等を旨としてこの活動を行います」と言うときに、「カッコつけ過ぎかな？」と思うこともあり、そのことばを目にしたとき「キレイゴトだよ」とシニカルに捉えてしまうこともあります。なのにフィンランドの人たちは、この言葉をきちんと口にするのです。どうしてでしょうか？ まだ答は見つけれませんが、私の予想は極めてシンプルです。

フィンランドは人口550万人の小さな国です。“立派な”誰かに任せていても社会は回りません。できるだけ多くの人に社会の運営に携わってもらう必要があるのです。だから、若者にかかわる人たちは、若者に「Participation (参加・参画)」

をうながし、そのために必要な平等でやさしい環境を提供しようとしているのです。

さて、日本はどうでしょう？人口でならば大国ですが、もう“立派な”誰かに任せておけばいいという余裕はありません。できるだけ多くの若者に社会の運営に携わってもらえるよう、若者が跳躍する力を蓄えられる多様でやさしい環境をもっと増やさなければならぬと思います。

この原稿を書いているときに、34歳のサンナ・マリンさんが首相に就任するというニュースが流れました。ある記事によると、子ども時代は貧しく、成績もよくなかったサンナさんは「ユースセンターに自分の居場所や仲間を見つけ、それをきっかけに社会との関わりを深め、政治の道を目指した」といいます。若者の参加を促す環境との出会いが、大きな社会資源を生みました。

少し照れくさいことですが、未来をなんとか成立させるために、自然教育に携わる私たちも"美しいことば"をていねいに使っていきたくいですね。



派遣団のメンバーとフィンランドのユースワーカーたち

● 金山 竜也 [かなやまりゅうや]  
一般財団法人青少年国際交流促進センター職員





# 私がハマった理由

高野 千春

大学教員になって数年が経ち、自分が担当する初年次科目や実習科目をもっと工夫できないものかとネット検索をしていたところ、「アウトドアゲーム指導法講習会」という興味をそそるタイトルを発見し、2013年に初めて参加しました。ここで、アウトドアゲームの楽しさ、面白さ、奥深さにすっかり魅せられ、この時出会った「アイオレシート」は困った時の玉手箱となり、いつもお世話になっています。

この講習会は私のツボにはまってしまい、毎年10月の連休（今年からは連休がなくなってしまいますが）は極力仕事を入れずに、参加し続けています。私がこんなにハマってしまった理由を、あらためて考えてみました。

まず、自分が本気で楽しむ体験ができること！普段は指導者としてアウトドアゲームに関わる事が多い私にとって、この講習会は純粋にゲームを楽しめる幸せな3日間で、心も体もリフレッシュできます。日頃学生に「自分が楽しめてこそ他人を楽しませることができる」と偉そうに語っているのですが、自分が楽しむ感覚はとても大切です。また、真剣にゲームに挑戦し、新たなゲームの創作に没頭すると、それまでになかった発想にも気づき、視野が広がる気がします。

次に、さまざまな背景の人と出会えること！この幸せな時間を共に過ごす参加者や講師の方々は、年齢、性別、職業や立場は異なりますが、アウトドアゲームを楽しみたい、楽しく展開したいという思いは共通です。ですから、どんな失敗も面白おかしく笑い飛ばし、次のチャレンジが気持ちよくできる素晴らしい雰囲気が生まれます。物の見方・考え方が異なる仲間間で知恵を出し合うことで、思いもよらないアイデアが浮かび、また、同じゲームでも自分とは違う進め方を学ぶことができます。

最後に、頭の中が整理できること！

アウトドア好きな両親は私が幼い頃から自然の

中で自由に遊ばせてくれたので、今でもその場でできる遊びを考えるのが大好きです。そのおかげでゲームの引き出しが増え続ける一方、指導者としてこれらの体験をうまく整理できず悩んでいました。この講習会と出会って、それらを系統立てて整理する手立てを知ることができました。

私にとって、この「アウトドアゲーム指導法講習会」は、指導法を学べる機会というだけでなく、心身ともにリフレッシュし、充電できる貴重な時間です。これからも可能な限り参加し、たっぷり充電させてもらう予定です。最後までお読みくださった皆さまと、いつかどこかの講習会でご一緒できたら嬉しいです。



那須甲子講習会（2018年10月）での筆者

## ● 高野 千春 [たかの ちはる]

平成国際大学スポーツ健康学部准教授

筑波大学大学院体育研究科修士課程修了。福岡市立高校教諭、福岡大学体育学部非常勤講師、九州医療センター附属看護助産学校非常勤講師を経て、平成19年より現職。

## 予 告

令和2年度：アウトドアゲーム指導法講習会

2020（令和2）年10月9日（金）～11日（日）

国立那須甲子青少年自然の家

\* 昨年は台風19号の接近でやむなく中止となり、  
今年と同じ場所で再開します。



# アウトドアゲーム指導法講習会 国立妙高青少年自然の家で 「1日コース」を開催

今回は県外で「初」実施をしました。県外と言っても県内の国立施設よりも近い場所です。10月の終わりでしたが、紅葉で色づいたカラフルな葉っぱは多くはなく、期待していたので残念でした。しかし、参加者の皆さんは有るものを最大限に活用し、楽しい活動となりました。

もう一つの「初」は講師の組合せ、ペアでの指導は始めてでした。それぞれの得意不得意が生かせた内容となりました。

今回は平日の開催でしたが、休日開催の要望がありましたので、次年度の参考にしたいです。



## 開催概要

日時：2019年10月31日（木） 9:00～16:00

会場：国立妙高青少年自然の家

参加者：13名（男性7名、女性6名）

講師：瀧 直也（信州大学教育学部）

加々美貴代（NPO法人やまぼうし自然学校）

主催：公益財団法人日本教育科学研究所

共催：NPO法人やまぼうし自然学校



## 活動内容

瀧講師のアイスブレイクゲームから始まりました。定番ものからアレンジしたものまで、さすがです、いっきに場の空気が和みました。じゃんけんを使ったゲームや数集まり、指定の人数に集まってからのバラエティーに富んだ内容に参加者も一気に打ち解けていきました。今回の特徴として20代、30代、40代、50代と様々な年代の方の参加があったことです。

アクティビティは全部で7つを体験して頂きました。午前中は課題解決型の「移り木」（加々美）、「バケツ2ボール」「森の危険物処理班」（瀧）の3つを実施しました。いずれも声を掛け合い、コミュニケーションを十分とり、工夫をして取り組んでいました。

昼食後は「手と鼻で自然観察」（加々美）、「見てみてわたしのお洋服」（瀧）、「森の気持ち探し」（加々美）、「スカイライトギャラリー」（瀧）の自然学習型、自然体験型、創造イメージ型が主体の4つを実施しました。「手と鼻で自然観察」ではまるで見えていた

かのような絵が再現されていました。目隠しを外した時の太陽の眩しさにも改めて驚かされていました。

最後の「スカイライトギャラリー」では、紅葉で色とりどりの葉っぱが使えるだろうと想定していましたが、紅葉の遅れで色合いが少ない中でも工夫をして素敵な作品に仕上げていました。



ビニル傘を使ったスカイライトギャラリー



## 参加者の声

- 野外ですぐに活用できるものが沢山あった。
- 応用もききそうなものばかりなので、対象に応じて難易度も変え易いと思った。
- 季節・内容を変え、定期的に開催して欲しい。
- こういった野外活動が初めてでどれも新しい体験で楽しかった。
- どのゲームも全て最高でした。自分は幼児を連れての活動場面が多いですが、アレンジによって使えるものばかりでした。



## 講習会を終えて

今回の講習会でもIOREの汎用性の高い「いつでも、どこでも、だれとでも」教材だと感じた1日でした。

受講生のみなさんには、野外活動のきっかけ作りとして大いに活用し、また新たな仲間にも紹介して欲しいです。

報告：加々美 貴代 [かがみ きよ]

NPO法人やまぼうし自然学校 代表理事



# アウトドアゲーム指導法講習会 今年も北海道で開催！ 国立日高青少年 自然の家との共催で「1泊2日コース」

## 開催概要

昨年に引き続き今年も北海道での講習会が国立日高青少年自然の家との連携により開催されました。今年も、道内自治体の職員・児童クラブ指導員だけでなく高校生も参加しました。

日程：2019年11月9日（土）～10日（日）

会場：国立日高青少年自然の家（北海道日高町）

講師：中丸信吾

当研究所のレギュラー講師が出張指導し、1泊2日に凝縮した講習会。ゲームの体験だけでなく、ゲームの創作まで展開し、充実の講習会となりました。

## 活動内容

### 11月9日（1日目）

開講式の後、早速、フィールドに移動して活動開始。まずはアイスブレイク、お互いの名前も覚えあうという間に楽しい雰囲気。続いて課題解決型ゲーム「移り木」「キーパンチ」「大脱走」を体験しました。

雪のちらつく寒い中、身体活動の多いゲームも交えながら、課題の達成に向けて寒さも忘れて夢中になって体験しました。

課題解決型ゲームが終わると、自然学習型ゲーム「見れば見るほど、な～るほど！」を体験。2チームに分かれて、探してきた見れば見るほどな～るほど！なものをクイズ形式で互いに紹介。前のめりになって目を凝らしている姿はまさに子どものようでした。

続いて、自然体験型ゲーム「ハンティングゲーム」「森のビンゴ」を行いました。フィールドを駆け回って獲物を見つけハンターに向かって大声で吠えたり、ビンゴカードを片手に自然物を拾いに行ったり、森の中をたくさん動き回りました。

夕方には「子どもたちの体験活動」に関する講義。子どもたちにとっての自然体験の価値についてデータを示しながら説明し、自然体験活動の教材として活用できるIORE Sheetの紹介もしました。

夕食後のナイトゲームは「光の虫眼鏡」。創造イメ

ージ型ゲームとして展開しました。真っ暗なフィールドで、光に照らされる印象に残った様子やものをもとにして、俳句をしたためました。

それぞれのゲームを体験した後は、いよいよゲーム創作。ゲーム創作のポイントを解説し、ゲームづくりが始まりました。

### 11月10日（2日目）

朝食後、創作ゲームの仕上げです。アイデアを形にするために、シミュレーションをして検討している様子。今年も新たなゲームが生み出されました。

発表を終えた後は、今回のゲーム体験とゲーム創作について振り返りを行いました。初日のゲーム体験よりもゲーム創作の方が楽しかった！という参加者も。

アイオレシートをベースにし、対象者のことを想像しながらアレンジしたり新しいゲームを創ったり、この講習会の大切な部分が参加者に伝わったようです。

1泊2日の講習会でもゲーム体験からゲーム創作までの展開が可能です。自然体験活動のボランティアや指導者の研修会を兼ねて実施することも可能です。全国どこへでも伺います。

最後に、講習会の機会をいただきました国立日高青少年自然の家の皆様、ありがとうございました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

報告：中丸 信吾【なかまる しんご】

順天堂大学スポーツ健康科学部野外教育研究室助教

日本教育科学研究所の自然体験活動推進委員会委員

# 思い出の箱を開ける鍵



鎌田 晴美

その一言を聞いただけで、涙が溢れそうになりました。心にしまっておいた大切なものと突然再会をしてしまったからだと思います。突然すぎて涙が溢れそうになりながらも、何故、涙が？と、体の反応に心が追いついていませんでした。

その場は一言の主を含めて数人で食事をしている時で、自分の中で起きていることを考える時間はありませんでした。じっくりと考えることができたのは数時間後です。自分にとって強烈な体験だったからでしょう。時間が経っているのに、思い出すと涙が溢れそうになるのです。東北訛りのアクセント&イントネーションが心地よく、包まれるような温かみのある声を手掛かりに記憶を辿っていくことにしました。いくつもある思い出の箱を一つずつ開けていくように辿って、開いたのは20年ぐらい前の思い出の箱でした。

当時、PA講習会のファシリテーターとして経験を積み始めたばかりの私は、活動中のグループが対立→対立解消へと向かうプロセスにどんなことが起きるかドキドキでした。もちろんグループのチカラで乗り越えていくと信じて待ちましたが、体験からの気づきをどう持ち帰ってもらうことができるか、毎回、アンテナを張り巡らして全神経を集中して挑んでいました。その結果、講習会後は決まって倒れ寝込むという有様でした。

思い出の箱の中で、その人は満面の笑みで「だいじょうぶだかなあ」と若かりし私を励ましてくれていました。当時、講習会で何度も訪れてい



た施設の担当スタッフです。グループについて見立てことを相談した際、よく言ってくれました。「だいじょうぶだかなあ〜はるみの思った通りにやっ」と。いい加減に答えられたのではなく、ちゃんと見守られているという安心感と自分の感性を信じる勇気をこの言葉からもらっていました。しかし、「だいじょうぶだかなあ」を随分前から聞くことができなくなりました。いち早く次のステージへと進んでしまったのです。

思い出の箱を開けた鍵「だいじょうぶだかなあ」の主は女性です。なんとも言えない温かい声に録音させてくださいと言いたくなっくらい。

少年たちの母のような存在で、更生していく少年たちを見守り続けています。どんなことがあっても、どんなに裏切られても見捨てない「だいじょうぶだかなあ」と言い続けるとお話ししてくださいました。今までに、この一言に心を包まれて、温められて、助けられた人は沢山いることでしょう。

場面は全く違うかもしれませんが、思いを込めて発せられた言葉には、今と過去を繋げてくれるチカラ、大切なものを思い出させてくれるチカラがありそうです。

● 鎌田 晴美 [かまた はるみ]

一般社団法人まなび創造アカデミー 理事

早稲田大学教育学部 非常勤講師

元PAJトレーナー